

福井県九頭竜湖における外来魚の侵入

根本 茂（福井県水産試験場 内水面総合センター）

九頭竜川と九頭竜湖

九頭竜川（くずりゅうがわ）は岐阜県との県境を水源とし、日本海に合流する延長 116 kmの福井県嶺北地方を流れる 1 級河川で、福井県のシンボルの一つとされています。

九頭竜川はアユやサクラマス等の漁場として全国的に有名であり、地方名：アラレガコ（標準和名：カマキリ）が生息している水域は天然記念物として指定を受けています。その九頭竜川の最上流部に昭和 43 年（1968 年）に建設されたのが九頭竜ダムです。九頭竜ダムは洪水調整と発電を目的とする、国土交通省と電源開発（J パワー）共同管理の多目的ダムで、そのダム湖（人造湖）は**九頭竜湖**と呼ばれており、面積 8.9km²、長さ 13km、最大水深 100m 総容量 3 億 5,300 万 t の国内でも有数の大規模ダム湖です。

九頭竜湖における外来魚

九頭竜湖では平成 19 年にコクチバスがはじめて確認され、平成 21～23 年度は九頭竜ダム管理事務所の調査によって、主にダム湖右岸側の浅瀬で繁殖が確認されています。平成 24 年からは福井県が主体となって捕獲調査が行われており、ダム湖の左岸側や流入河川の浅瀬でも数多くの産卵床が確認されています。また、平成 26 年からは国や県による分布調査に加え、地元自治体や漁業協同組合、民間協力者が協同で行う一斉駆除が実施されています。一斉駆除も含めた近年の年間捕獲数は平成 28 年のダム湖低水位期を除き、130 尾を超える中型から大型のコクチバスが捕獲されています。

調査によってわかってきたこと

これまでの調査によって、九頭竜湖のコクチバスの繁殖時期や活動時期がわかってきました。繁殖は水温が 15～16℃を超えると始まり、5 月下旬から 6 月下旬に産卵床が多く確認されます。産卵床はオスが水深 1m 前後の浅瀬の砂礫底で円形や楕円形の泥や砂を掃った場所をつくり、メスを誘って産卵させ、産卵後はオスが卵や稚魚を保護するために留まります。このような行動から、この時期に産卵床を横断するように小型 3 枚網を設置すると短時間で捕獲できます。親魚を捕獲すると卵や稚魚は他の魚類に捕食されることが多いのですが、可能であれば産卵床は踏み荒し破壊するなどして駆除しています。

繁殖期を過ぎると活動期に入ることから、大型の刺網を用いて水深 3m～10m までの沢が流れ込む入り江を横切るように設置すると捕獲できますが、在来魚類も捕獲してしまいます。流れの少ない深い淵を中心に設置した方が他の魚類への影響は少ないと思われます。また、12 月でも刺網に掛かることから、活動期であることがわかりました。

最近の調査では平成 23 年にはじめて確認されたウチダザリガニが捕獲されており、平成 28 年ダム湖低水位期には 1 回の調査で 178 尾のウチダザリガニが数珠なりに捕獲されました。

これからの対応

このように駆除調査を行っているにも関わらず捕獲数の減少は見込めず、さらにダム湖から下流でも捕獲情報があることから、もし九頭竜川の漁場にも広く拡散すれば河川の重要魚種であるアユやヤマメなどへの被害が懸念されます。

今後はダム管理者の協力を得ながら、民間協力者と協同した一斉駆除と監視を強化していくことが重要と考えます。